

2023年3月発行

第134号

浄土宗慶蔵院

伊勢市小俣町元町1211

TEL 0596 (22) 3726



地蔵講

画 山寄淑子

「このように死にゆくことが大切」だと、

私のために お釈迦様は死んで見せてくれたので

二月十二日「涅槃会」では、「涅槃図から何をいただくか…」をテーマとして話をさせてもらいました。当日の話はユーチューブにアップされますのでご覧いただければと思います。涅槃図が語りかけてくることは「自分の死をどのように受け止めるか」につきると考えました。

お釈迦様がこの世にお出ましになられたのは「すべての人々が心の闇と悩みと罪とによって、闇の中にさまよっている。そのことに心を寄せ、すべての人々を明るさと安らぎと聖さに復活して、円満な人に育て上げ、光明に導かれることを願って…」お釈迦様は、このような願いを持って、この世に現れてくださったのだと、山崎弁栄上人は述べておられます。

仏陀となられたお釈迦様にとっては永遠に生きることも可能なことだったのです。しかしお釈迦様は「最後の旅」に出て、「今より三か月後、クシナガラの沙羅双樹の間において入滅する」と宣言します。お釈迦様の最後の場所は、大きな河が流れる林の中。二月十五日、満月の日でした。北枕に横たわり、顔を西に向け、水を飲まれたお釈迦様の身体は、輝き、金色の光が発せられていました。

文政九年、十七世住職であった性誉上人は、本堂に心願成就の槃図を掲げお檀家の皆さんに、このように語りかけたのではないのでしょうか…。

「自分は、どこで、どのように死ぬのか、場所も日時も、自分で決めていかなければならない。縁を大切に、つながりの中にあっても、必ず死ななければならぬ時が来ることを覚悟して、身体はなくなっても「魂」「いのち」は永遠に生き続けることを南無阿彌陀仏といただき、満月のとき澄み切った、円満なるうるわしき姿の中に死に往くこと。そのように死んで見せることこそ、老人の最後の務めなのだ。涅槃図はこのことを説いている」

3月の行事予定



1日(水)	写経会 男性詠唱隊	午前10時～ 午後7時～
8日(水)	落語会「いちご亭」 南遊亭栄歌・安楽亭東風	午後7時～ 一会館にて 無料 おひねり歓迎
15日(水)	健康教室 歩き方教室 講師 馬場久美子先生	午後1時～3時 参加費500円
11日・18日(土)	絵画サロン 講師 山寄淑子先生	午後7時～8時半 一会館にて 参加費1回500円
21日(火)	春彼岸会・施餓鬼法要	午前10時～11時
22日(水)	地蔵講・地蔵堂開帳	午後1時半～3時
11日・25日(土)	戦没者慰霊平和の鐘鳴鐘 英語歌クラブ 講師 八木和美先生	25日、朝の勤行にて 午後1時～3時 一会館にて参加費 1回 500円 テキスト代月500円
9日(木)	ともいき英語サロン 講師 三浦邦昭先生	午前10時～11時半 午後1時半～3時 一会館にて 参加費1回1000円
10日・24日(金)	茶道教室 講師 河井宗恵先生 樋口宗恵先生 田島宗紀先生	午後7時～子供茶道教室 7時半～大人茶道教室 大人500円 一会館にて

慶蔵院豆知識

③1

シヨパンの幻想曲は、昭和二十七年、内村直也作詞、中田喜直作曲によって、日本人の心に染み入る歌として、新たないのちが吹き込まれることになりました。

「雪の降る街を 雪の降る街を 思い出だけが通りすぎてゆく
雪の降る街を 遠い国から 落ちてくる

この想い出を この想い出を いつの日か つつまん
温かき 幸せの ほほえみ」

今年は大雪の話が色々ありましたが、伊勢の地では、あまり大雪を見るようなことはありません。伊勢に降る雪は、遠い国からの思い出をつれてきてくれる雪のようです。ものをみな包み込み、清浄なる世界に変えてくれるやさしさを感じさせてくれます。慶蔵院の境内に降り積もる雪にも、伊勢神宮を真っ白に包む雪にも「あたたかさ」すら、感じさせられます。

伊勢神宮といえば、皇大神宮(内宮)と豊受大神宮(外宮)の両正宮を中心として十四か所の別宮、百か所の末社、別宮社などがあります。第十一代垂仁天皇の時代、五十鈴の川上、現在の地にお鎮りになりました。

この伊勢の地の四分の一を占めているという神宮林を、ブライドを持って守り続けている村があります。まるで遠い国からの贈り物のような広葉樹の原生林と植樹され手入れされた針葉樹林が広がっています。ものみな育まれる、「いのち」の源泉ともいえるべき神宮林が朝熊山の眼下に広がっています。何百年という時間の流れの中に、人の力によって、神宮が守られてきたのです。これこそ人類の永遠の遺産です。

風はまだ冷たく雪の知らせも届きますが、日差しは確かにのびて、境内の蠟梅も満開です。

(栄子)



浄土宗新聞を無料で
お渡しします!!

9ページの右下の広告欄を紹介します。
「法然上人の遺跡シリーズ」YouTube
動画が公開中です。
法然上人の「誕生篇」が閲覧できます。
文字を入力しても探せます。

7ページ「すべてのことには意味がある」
「悲しみも苦しみも、「必ず喜びや成功に
つながる。人生には無駄なことなどない
…」 「以前に経験したことが今にいかされて
いる」「9割失敗しても1割でも認めら
れるだけで続けていてよかったと…」



おしらせとおねがい

- ① 春彼岸のお塔婆の申し込みは3月6日をめどにお願いします。それ以降は慶蔵院までお持ちください。火曜日・金曜日は玄関右横のポストに入れておいていただいても結構です。
- ② 今月は3月22日、第四水曜日の午後1時半から「地藏講、御詠歌奉納」の日です。この日に合わせて、住職がお一人お一人のご祈願をさせていただきます。どんどんお詣りください。

誰にでもできる野菜栽培

「講習会」開催日時

三月十六日(木)

慶蔵院本堂にて

参加を希望される方は、事前に慶蔵院まで電話・ファックス等でご連絡ください。参加費は無料です。少しですが苗ももらえます。液肥は有料となります。



自宅の小さな空き地での栽培でもかまいません。場所がない方には、無料で使っていただける畑もあります。ご家族で、友人同士で、お一人でもかまいません。これまで農業、栽培など経験がない方も大丈夫です。お誘いあわせて参加してください。

住職の健康回復への道のり(十二)

この一年間、八尾の石垣先生に徹底した内臓調整(ロフ療法)の指導をいただき健康な状態を取り戻させていただいてきた経過は、この欄で報告させていただいたとおりです。

おかげさまでとても元気になりました。また、これまでの二十年間の活動を整理し、昨年の四月には「てらこや塾」の改変、八月末には「楸神宝農産」の解散を決定し、代表の座を退きました。そして人生の幕引きに向かって「慶蔵院」として、今、なさねばならぬことを見通して歩みだしたところです。寺での葬儀の勧め、永代供養墓の建設、身代り地藏尊の興隆など、速やかに進めなければならぬ課題などを、すでに動き出しながら検討しています。

何としても健康を守り、維持していかなければ住職としての大切な務めが果たせません。石垣先生からは、「疲れを残すな。食べ過ぎるな。仕事を分散するように。猪突猛進はだめ」と毎回のようによく注意勧告をいただいています。

ところが十四日に行った二十四時間心臓ホルター検査で、朝方に七秒ほど心臓が止まっている状態が発見されました。これは注意しなければなりません。油断しているとこれまでの取り組みを水の泡にしてしまいかねません。心して心臓に負担をかけない身体づくりに精進してまいりたいと思えます。まずは、食事の量の再検討、負担をかける夜の食べ過ぎは絶対に避けること…など気をつけていきます。

落語会「いちご亭」

今月は 第2水曜 八日

無料で聴けら
おひねりを!

出演

午後七時慶蔵院「一会館」にて
落語 法話

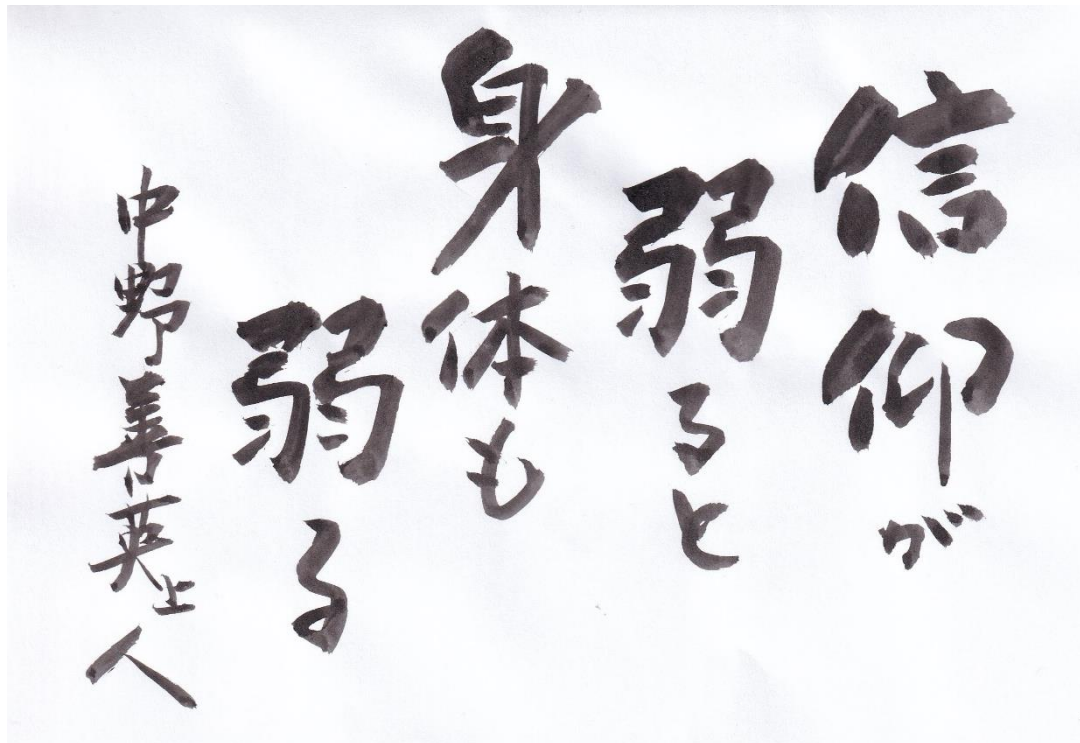
慶蔵院住職
南遊亭栄歌

安楽亭

春寒の大仏山を登る朝

(「知恩」三月号「柳壇」に掲載)

奥田 悦生



「文芸春秋」三月号の大村崑さん×巽一郎さん（整形外科医）対談記事が参考になりました。崑さんが八六歳になってから身体を鍛え始めて、いま九一歳。筋トシではスクワットが一番得意、腹囲が九二センチから七七センチになっています。崑さんは一九歳で右肺を切除しています。医者から、四〇歳までしか生きられないと言われていたそうです。

巽さんが聞きます。

「体が変わる前には必ず心が変わるターニングポイントがあったはずです」と。

崑さんは、四〇歳になって藤山寛美さんから「門戸厄神に行つて厄を取ってもらつてこい」と言われ、以来五十年通つていて、今ではお寺さんとは親戚のように付き合っているということです。

この話を聞いて巽さんが次のように話しています。

「崑さんがこれだけ元気になったのは、お寺さんとの信頼関係と、祈りやと思います。僕は病氣で全部治る思つていて、実際に治つた人をたくさん見てきました。治つた人の共通項は何かといえは、どこかで気が変わったこと。心の変化です。崑さんは恐らく『俺は厄神さんに守られている』と実感して変わったんじゃないですか」と。

「祈り」は気を変え、心を変え、そして体も変えらる。私たちが念仏するものは阿弥陀様に護られていると信じて「智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏」に専心したいものです。

アイルランドに留学していた横井久美子は、イギリスによって、森林を燃料とするために伐採され、大地を奪われたケルト民族の「祈り」に共感し歌っています。

「今はもうあれ果てた、ふるさとのあの森 山もなく 谷もなく
せせらぎも消えた 命あるものみな 奪われた地よ ただ残っているのは 石や岩ばかり…よみがえれ我が大地 ふたたびこの手に」

我が身体は、いのち宿る大地そのものなのではないでしょうか。